

匹見町埋蔵文化財調査報告第27集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XI

平成11年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告第27集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XI

平成11年3月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本書は、平成10年度に実施した詳細分布調査であります。主体は国道488号線澄川バイパス改築（改良）工事に伴う調査分の報告書であります。

本遺跡は、調査区内域に「フロノ段」「後木戸」といった地名、あるいは立地上からみて、以前から中世期の山城跡ではないか、といわれていた周知の遺跡であります。したがって上述の事業に伴い、調査を実施したところであり、本報告のとおり、これが裏付けられたということでありました。しかしながら、確認調査という極めて狭掘、しかも当地点が後世におけるところの削平などが行われていたらしく、明確的な位置付けがなされていないのが現状であります。この調査に引き続いて行われた本格的な発掘調査において、どの程度の位置付け、あるいは性格などが浮き彫りになっているのかは、次年度におけるところの発掘報告書を待たねばなりません。

いずれにしても、こうした地味な調査をつづけながら、我われの祖先たちがどのような想いで、どう生きてきたかなどを知ることは大切なことであろうと考えております。そういうことを知ることによって、我われの現在の在り方を考えるとともに、強いては将来に対して道しるべの材料になるものと確信いたしております。

最後になりましたが、発掘調査に携われた作業員の皆様方、また御協力いただきました土地所有の方がたにお礼を申し上げ、甚だ簡単ではありますが、発刊の序文といたしたいと存じます。

平成11年3月

匹見町教育委員会

教育長 寺 戸 等

例　　言

1. 本書は、平成10年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2. 調査は、島根県文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会		
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代	
調査補助員	匹見町教育委員会主事	山本 浩之	
	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田 美文	
	(臨時職員)		
	タ	大賀 幸恵	
	タ	大谷 真弓	
調査指導	島根県教育委員会文化財課		
	島根県立松江南高等学校教諭	山根 正明	
	広島県立美術館学芸課長	村上 勇	
事務局	匹見町教育委員会教育長	斎藤 催人	(平成10年10月8日まで)
	タ	寺戸	等(平成10年10月9日から)
	匹見町教育委員会次長	渡辺 隆	
	匹見町教育委員会主任主事	斎藤 一臣	
発掘作業員	栗田 定 森脇 雅夫	岩本 守 桐田 治雄	
	村上 武司 村上 強	村上 稔 平谷 吾郎	
	大谷笑美子 斎藤恵美子	益田 愛子	

3. 調査に際しては、土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大な協力をいただくとともに、また島根県益田土木建築事務所匹見出張所の和崎技師にもご協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 本書に記載した配置図は縮尺1/1000のもので、島根県益田土木建築事務所のご協力を得、また調査地点図は縮尺1/25000を使用したものである。なお標高測量は株式会社ワールドの協力を得て行った。

5. 編集にあたっては、匹見町埋蔵文化財調査室の大賀幸恵・大谷真弓氏らのご協力を得て、執筆は渡辺友千代・山本浩之・栗田美文(章末に記す)が担当し、編集は渡辺友千代・山本浩之がこれを行ったものである。

目 次

第 1 章 発掘調査の経緯と経過.....	(渡辺友千代)	1
第 1 節 現地調査以前.....	1
第 2 節 現地調査以降.....	1
第 2 章 地域概観.....	(栗田 美文)	2
第 1 節 地形的立地.....	2
第 2 節 歴史的環境.....	2
第 3 章 調査の概要.....	(渡辺友千代)	6
第 1 節 はじめに.....	6
第 2 節 調査区の設定.....	6
第 3 節 層序と層位.....	6
第 4 節 遺構.....	9
1. はじめに.....	9
2. 各調査区の遺構表出状況.....	9
第 4 章 出土遺物.....	(山本 浩之)	14
第 1 節 はじめに.....	14
第 2 節 実測遺物.....	14

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 遺跡位置と周辺の遺跡	3
第3図 調査区配置図	5
第4図 土層図(1)	7
第5図 土層図(2)	8
第6図 遺構図(1)	10
第7図 遺構図(2)	12
第8図 出土遺物実測図(1)	15
第9図 出土遺物実測図(2)	17

図 版 目 次

図版01	調査地点鳥瞰
図版02	1. 嶺城跡遠望（南西から） 2. 北西からみた調査地点 3. 南北トレンチ2南半部の堆積状況（南東から）
図版03	1. 主軸トレンチ左辺部の東壁・南壁とその堆積状況（西から） 2. 主軸トレンチ左辺部・中央寄の掘削状況（南西から） 3. 南北トレンチ2北半部の東壁と表出した遺構（西から）
図版04	1. 南北トレンチ1北半部の掘削状況（南西から） 2. 南北トレンチ3北半部の桑の植培の跡（北西から） 3. 南北トレンチ2北半部から出土した砥石と石列表出状況（東から）
図版05	1. 南北トレンチ1南半部のP04表出状況（東から） 2. 南北トレンチ2南半部のP01表出状況（東から） 3. 南北トレンチ2南半部のP02表出状況（西から）
図版06	出土遺物

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 現地調査以前

島根県益田土木建築事務所匹見出張所から、口頭による国道488号線澄川バイパス改築（改良）工事の計画案が打診されたのは平成8年5月のことであった。匹見町教育委員会としては、計画案の一部には周知の遺跡が存在していることから、計画の変更を要望したのであった。その後、同事務所から諸状件上、その変更は無理であるとの旨を受けたので、県教育委員会との協議を要望するとともに、合わせて当匹見町教育委員会が調査を実施する場合は、同年10月以降になる模様を伝言した。そして、平成8年8月21日付けの島教文財第6号の18により、同地点に係る周知の遺跡部分の保護を重点とした調査の実施が通達されたのであった。

その後事業者側は、平成9年7月16日付けの益土第996号で、当匹見町教育委員会と協議したい旨と、調査に係る経費の見積等の提出が要請された。当委員会はこれを受けて、分布調査は実施するものの同10年度以降になることを、同9年7月22日付けの匹教第146号で通知するとともに、引き継ぎ県教との協議も続行されることを希望した。そして同年12月に入ってからは、本格調査を必要とする場合、別途協議をすることも申し合わせ、来春に調査に入ることを了承したのである。

第2節 現地調査以降

分布調査の実施にあたり、平成10年3月6日付けで文化庁宛に発掘調査の通知を提出するとともに、現地調査は同年4月15日から始めたのである。その調査結果、現畠地と化されている調査対象地は、該当期の遺物・遺構は伴うものの、大部分において後世におけるところの比度の高い削平が行われていたことが判明したのであった。しかし、それは数箇所のトレンチで明らかになったことであるため、全貌を把握するには本格的な調査が必要となり、一応同年5月末で現地調査は一担打ち切りとしたのであった。

その間の稼働日数25日間、196人役を費やし、調査面積は133.5m²であった。また同年6月8・9日の両日には、島根県中近世城館研究会事務局長の山根正明（松江南高校教諭）氏に現地に足を運んでいただき、ご指導及び、また今後の対応などについてご教示を得て、本分布調査は無事終えたのであった。



第1図 遺跡位置図

(渡辺 友千代)

第2章 地域概観

第1節 地形的立地

本報告する城跡は、島根県美濃郡匹見町大字澄川イ817番地ほかに所在する周知の遺跡である（第1図・図版01）。

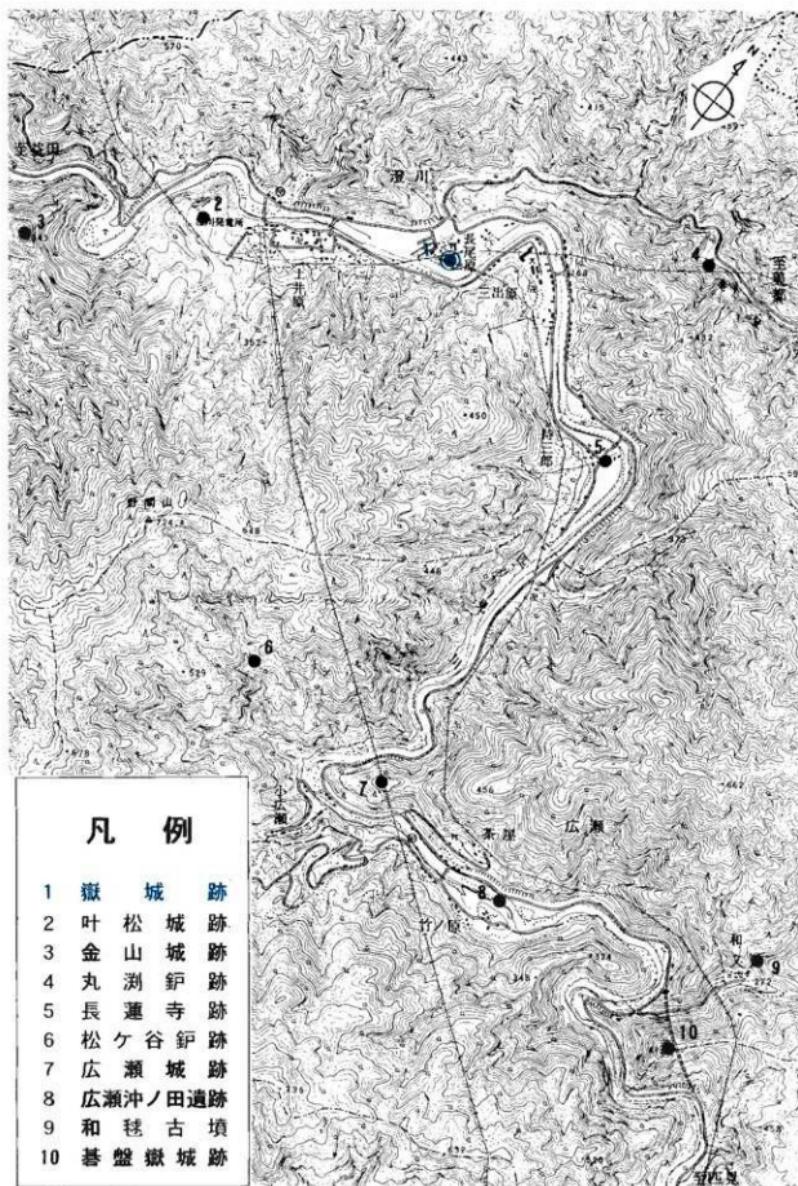
その遺跡が所在する澄川地区（持三郎・三出原・長尾原・土井原・谷口・能登）は、町域の中で北西端に位置し、南側は野間山（724m）が迫り、また北西側は美都町、益田市との境山としての日晚山（743m）などの脊梁山地が北東—南西方向に連なっており、その山地に沿って細長い地形をなしている。

一方、このような典型的な山間地を貫流する匹見川の源流は、広島県境にあって南西流し、そして中流域では北西に流路を変え、本地区において能登川・石谷川などの河谷を集流して、狭長な谷平地を形成しながら本流高津川へ流下する。その北西流する匹見川が形成した地区内の河岸段丘は、左右に形成されていて、それらの段丘面は狹小ながらも水田を中心として可耕されているのである。

こうした立地下にある支城と捉えられる本遺跡は、匹見川の右岸（長尾原）に形成された北東—南西方向約1000m、北西—南東方向最大約300mを測る弓状をなした河岸段丘のほぼ中央部に位置する。また、そこは北面側の山地が南方向に突き出して舌状を成す尾根の先端部に当たり、匹見川との比高差約30mを測り、その山上は平坦に削平された3段から形成され、畠地として利用されている場所である（図版02-1・2）。その場所に立つと、南西方向（約250m）の眼下に、北西流する匹見川と南西流する能登川との合流地する立地性が手にとるように読みとられ、その下流には土井原集落の緩傾斜地、そしてそこには本遺跡の本城と想定される叶松城を見通すことができ、また対向する北東側の上流域には、役場支所、小学校、JA西石見などの諸機関や数軒の商店などが点在する三出原集落を望むことができる。また北西側約150mの地点で、北東—南西方向に国道488号線が走り、そして南西流する能登川沿いに美都・匹見線が貫道する県道が交わっているという要所にある。つまり、その立地は3方が眺望できるといった城塞としての機能を兼ね備えた位置であったということができよう。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には、原始古代に遡れることのできる遺跡は顕著でない。しかし中世期の遺跡ということになると、匹見川沿いの丘陵地の山上に意外と分布しているのである（第2図）。まず顕著な遺跡として捉えられるのは、本遺跡と関わりをもつていると考えられる南西約1kmにある叶松城であろう。その叶松城は、寿永年間（1182～85）頃に平教盛の一族盛弘によって築城され、その後（室町中期）、澄川大和守秀行・俊長が拠城し、その澄川氏も寺戸資清に攻められ、都茂村金谷（現美都町）に落ち延びたといわれている。その澄川氏の居城したという伝承地は下流にあたる金山城跡でも残っており、これらは伝承の城を出ないのが現況である。また『石見諸家系図録』にあるところの寺戸



第2図 遺跡位置と周辺の遺跡

氏の系図によると、益田藤兼の家臣寺戸和泉守資清（12代）が尼子征討に戦功上げ、澄川の地200貫の所領を与えられて、叶松城を築いたといわれている。そして13代資能の時代には、その子資久（長男）は本城を継承し、その次男資長は本調査の対象とした【嶽に住む】とある。また三男の資信は土井ノ原に分家とも記されているのである。その寺戸氏が菩提寺とした自得庵は、本城の北東約500mにある岩頭山にあって、そして城山の南東麓の大台に居館を構えたと伝えられる。また、その背後の山中には、資清の墓といわれる自然石が今でも立っている。これらの伝承やまた資料からみて、該当期の本城は、おそらく3代にわたって構築されたものと考えられている。そこで資長が撫もったという嶽城は、立地性及び形態からみて、戦時における最前線の見張りあるいは砦的な性格をもった支城的なものか、と考えられるに充分な立地性を示しているといえる。そういえば、本地点城には「後木戸」や「フロノ段」の地名として遺っており（第3図）；前説をより補強するものであろう。

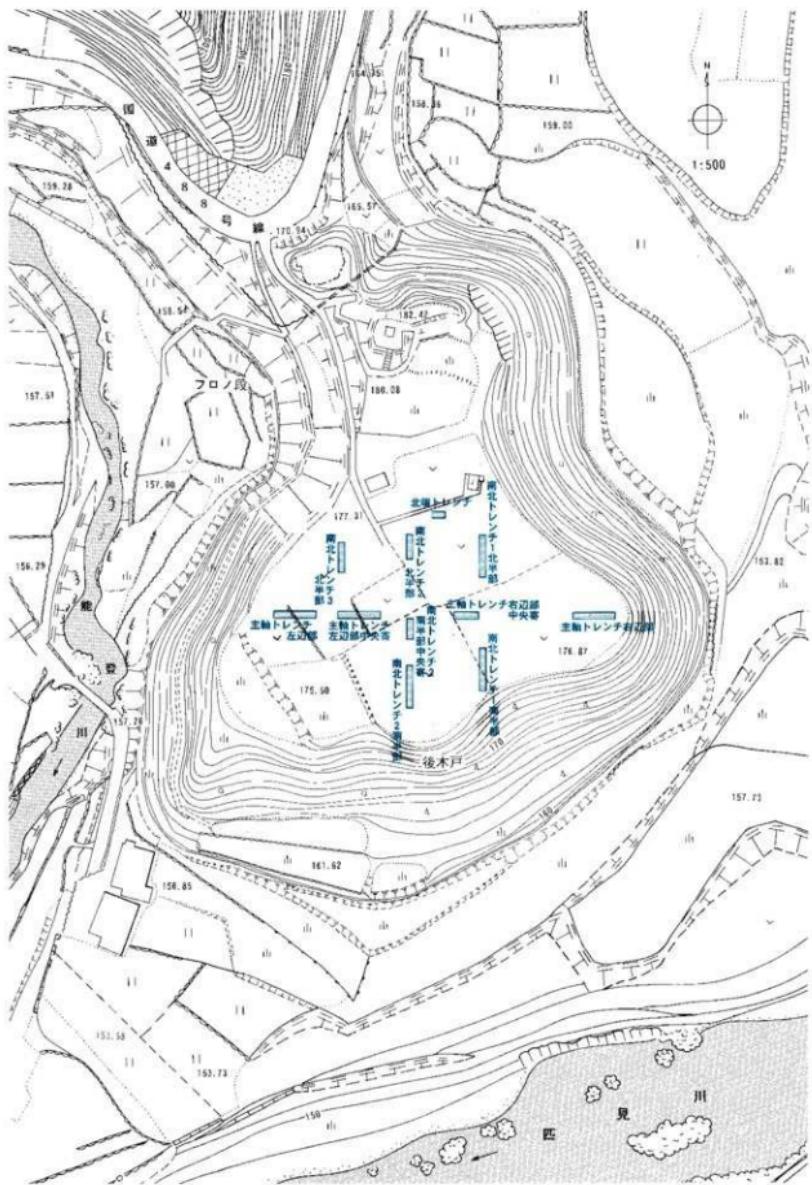
一方、永和2年（1376）の益田兼見時代に書かれた「益田本郷御年貢田数目録帳」には、上墨河・物三朗・長尾原・山崎・佐奈平原などという本地域に存在する名田が記述されていることから、この地区が少なくとも室町時代（初期）には、益田氏による統治がなされ、本嶽城が何らかの関与した可能性もあると考えられるものである。

（栗田 美文）

参考文献

矢富熊一郎著『石見匠見町史』

益田市教育委員会『史料集・益田兼見とその時代』－益田家文書の語る中世の益田（1）－



第3図 調査区配置図

第3章 調査の概要

第1節 はじめに

本調査対象地は、匹見町大字澄川イ817番地に所在し、その現地表面標高は、低位部分で175.7m、高位部分で177.265mあって、その差約1.5mを測る標高範囲を調査したものである。

その現地の平坦を成した中心部分は、畑・草地と化しており、もと旧澄川小学校の跡地だったといわれていた場所である。また緩傾斜を成す周辺部には桑の木などが植生されている一方で、急傾地には姫竹が繁茂していて、急には調査に入るには困難な状況であった。そこで事業側との話合いでの、それらの伐採をお願いするとともに、また一方で地形図などの引用においても、ご協力いただいたのであった。

第2節 調査区の設定

調査区は、事業の計画予定地内（約5000m²）のうち平坦部を成した約3500m²範囲に設定することにし、まず幅広であった地点の東—西方向に80mを測って、これを主軸線とすることから始めたのである。

そしてこの主軸線に沿い、適宜に調査区を設けることにした。それは幅1.5mを測るもので、長さ10mのものを3箇所、そして6m測るもの1箇所としたのである。また磁北方向は、地形的立地から任意に3列とすることにし、その各列に適宜に6箇所設けたのである。これらの調査区の長さは区まちではあるが、幅においては1.5mに統一してトレンチ方式とし、場合によっては一連的に連結できるように区画したのであった。一方ではトレンチ法といいながらも、方眼的区画の造り方であるため、小・大グリット法に移向できるようにも配慮したのであった（第3図・図版02-2）。

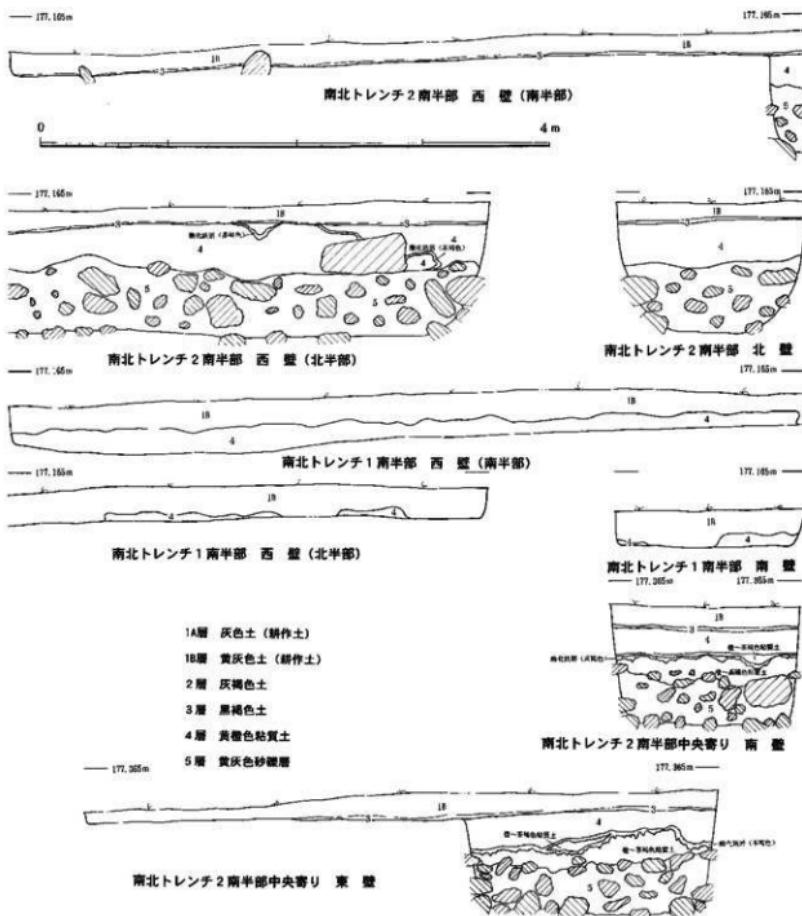
また地区名は、東—西方向の主軸としたものを主軸トレンチと称し、南—北方向のものを南北トレンチと総称することにした。そしてこれらに追随して設定した各調査区は、おもに方向的位置からみて、右辺にあるものは「右辺」というように、総称の語尾に付加して連称することにしたのである。

なお、これらの平面的調査面積は、133.5m²であった。

第3節 層序と層位

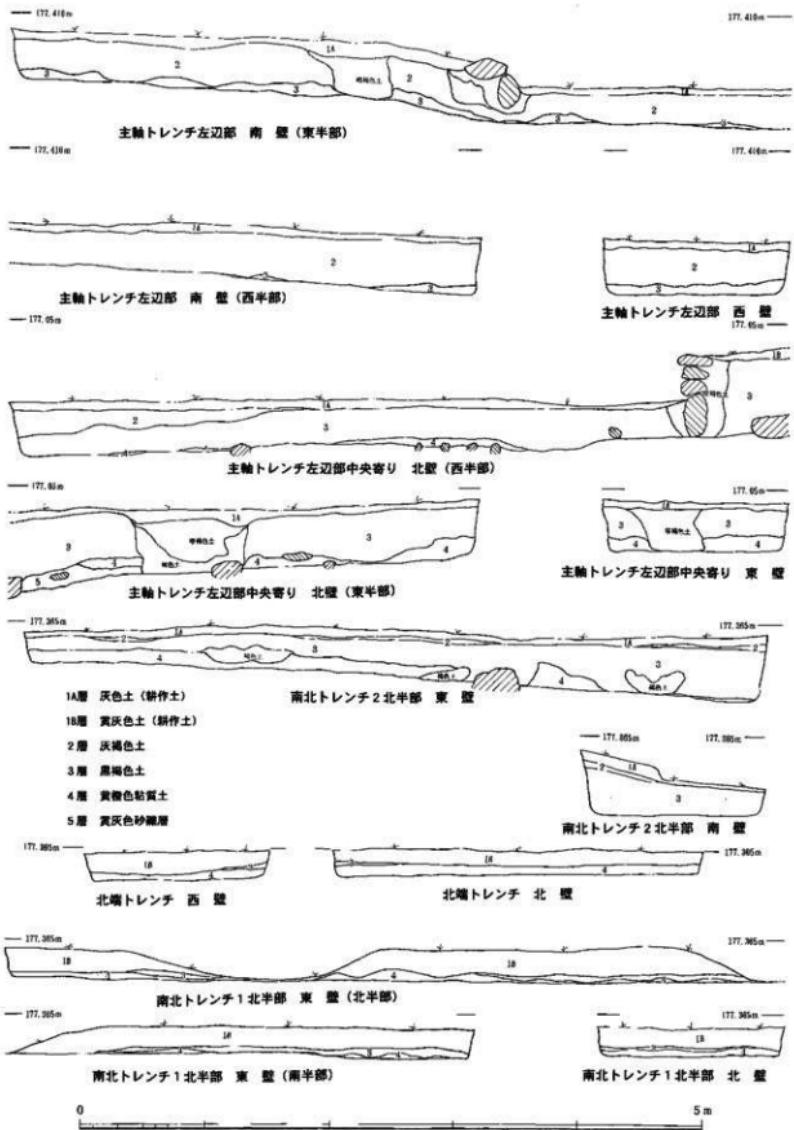
本調査区の基本的層序は、1層の耕作土、2層の灰褐色土、3層の黒褐色土、4層の黄橙色粘質土、5層の黄灰色砂礫層の順で堆積していた。

ただし、2層の灰褐色土としたものは、南西端部へ派生した地点域の層序には堆積していたものの、比較的平坦な北東半の大部分では欠除していたのである（第4図・図版03-1・-2・-3）。これは南西端部辺の堆積状況、そして欠除する北東辺が平坦という地形様態からみると、該当地点域が比度の高い削平が行われたことによって生じたものと想定できる。



第4図 土層図(1)

したがって、原地形では灰褐色土は堆積していたものと思われ、そしてその削平の深度は、その下位の3層黒褐色土も及んでいる部分もみられるなど、強い削平が行われたようである。とくに本調査域の中央から北東半辺は著しく、本層の消去あるいは尖滅部分などの堆積状況から窺われる。このような比度の高い削平が行われた要因は、本地点域が旧澄川学校（昭和9年に廃校）の跡地であったと伝えられていることから、その建設または整備に関わって行われたものだったと考える。勿論、問題としている中世期の山城跡と想定していることから、該当に関わって成された可能性も



第5図 土層図 (2)

あろうが、その遺構などの遺存性が極めて低いところからみると、前者によるところが大きかったと想像する。

耕作土である表土は、灰色土（1A）としたものと黄灰色土（1B）のものがみられ、前者は南西端辺、また後者は調査域全体にみられる層序であった。この違いは下位層に影響したものも考えられ、つまり削平された後、畑地に転用されて付加した層序であったと思われる。したがって、南西端辺の削平が少なかったと思われる部分では2層灰褐色的であるとともに、また1B層としたものは、粘質性の4層黄橙色土に類似した土質であることからいえるのである。

なお、層位については上述しているように、1～3層においては原堆積を在存しているものとはいえず、したがってその堆積高などは判らない。また明確ではないが、中世期の文化層は、2層としている灰褐色土層ではなかったかと思われる。それはピットなどの遺構が4層などの下位層に陥入した状況を捉えると、その遺構内に特に2層の灰褐色土が嵌入しているからである。また中世期以外では他に黒耀石・安山岩片などの縄文期のものが数点出土しているが、これは恐らく3層の黒褐色土に所産したものであろうと考えられる。いずれにしても、遺物・遺構の包含の層位が比度の高い削平が行われたことによって、それらを不明確にしていることは事実であった。

第4節 遺 構

1. はじめに

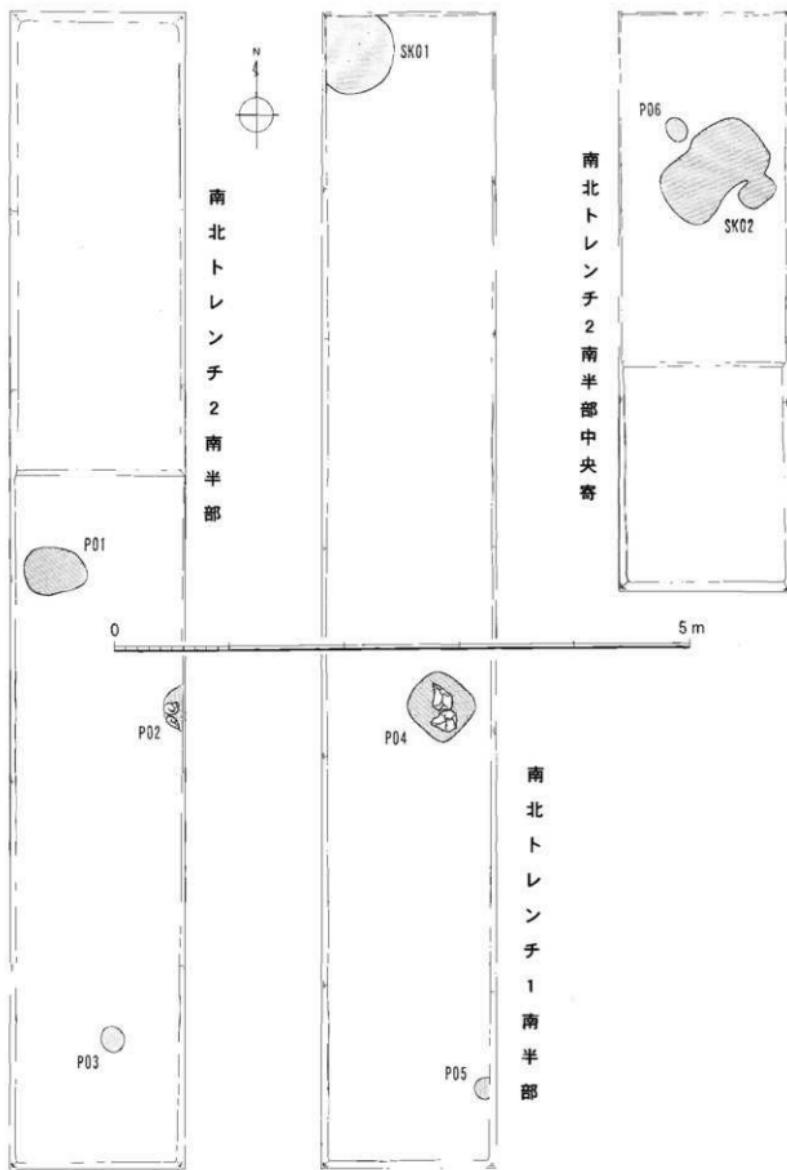
本調査で検出された各遺構の大半は、3層黒褐色土と4層黄褐色粘質土との層界面に表出したものである。またこれらの各遺構は、平面的大きさからみて柱穴と想定されるものをPとし、それ以上に1巡り大きく別用途のものであったと想定されるものをSKと略号した。しかし柱穴といつても、これらの遺構は中世期の所産と考えられることから、掘立柱のみを捉えたものではなく、礎石式も介在したであろうと想定し、径40cm前後のものまで拡大解釈して捉えている。したがってSKとしたものは、それ以上の土坑状のものと想定したのである。そしてこれらの各遺構は、平面的表面のみであって、本格調査との兼合い（本格調査が生じたからである）から掘削することなく、したがって下位における坑形などは明らかではない。

以下、断片的で、しかも順序性のないまま気付いたことのみを若干みていくことにしたい。

2. 各調査地区的遺構表出状況

南北トレンチ2南半部調査区（第3図・第6図）

本調査区は、南西側に設定した幅1.5m、長さ10mを測るもので、柱穴と想定されるものが3基表出している。このうちP01は、2基が重複したものと思われる（図版05-2）。P02は、壁ぎわに表出したものであるため明らかではないが、2層の灰褐色土そして礎が陥入していることから遺構として捉えられる（図版05-3）。またP03は、径凡そ20cmを測る円形状をしたもので、掘立柱式の柱穴であろうと考えられる。これらの3基は、南半部に断片的に表出しているが、北半ではみられなかった。なお本区の1層からは、陶磁器など10数点が出土している。



第6図 道 構 図 (1)

南北トレント1南半部調査区（第3図・第6図・図版04-1・図版05-1）

本調査区に表出した遺構は、柱穴状のもの2基、そして土坑状のもの1基である。そのうちP04としたものは、径約50~60cmを測るやや方形状のもので、土坑上に2石の割石を伴っていた（図版05-1）。この割石は40~50cmを測り、同個体のもので人「」を加えて割られたものと考えられる。P05は、南端部の壁ぎわに表出した径凡そ20cm前後を測るもので、平面坑形から掘立式と想定される柱穴状のものである。またSK01は、径凡そ70cmを測る円形土坑と想定されるもので、これらのいずれの遺構には2層の灰褐色土が陥入し、地山とは色調を異にする。

なお遺構内は掘削していないので遺物を伴っているものは判らないが、1層の灰褐色土には陶磁器や瓦器質・鉄器類が出土し、その多くは中世期の所産のものであった。

南北トレント2南半部中央寄（第3図・第6図）

本区は、南北トレント2南半部トレントから北方向に7m延長した地点の調査区名で、幅1.5m、長さ5mを測るものである。本調査区の1層からは陶磁器類4点、鉄器類2点が出土し、また3層に搬入していたと思われる数点の陶磁器類も出土した。

遺構は、柱穴状のものと重複したと思われる不整形の土坑1基と、また柱穴状の1基が北半に表出している。これらの2基は、共伴遺物の不明確から断定はできないが、1・3層に搬入したものと考えられる遺物には中世期の所産が捉えられることから、該当期のものである可能性もあると考えられる。いずれにしても、このような分布調査での中途的な調査は、本格調査で明らかにしていかなければならない課題であろうと思っている。

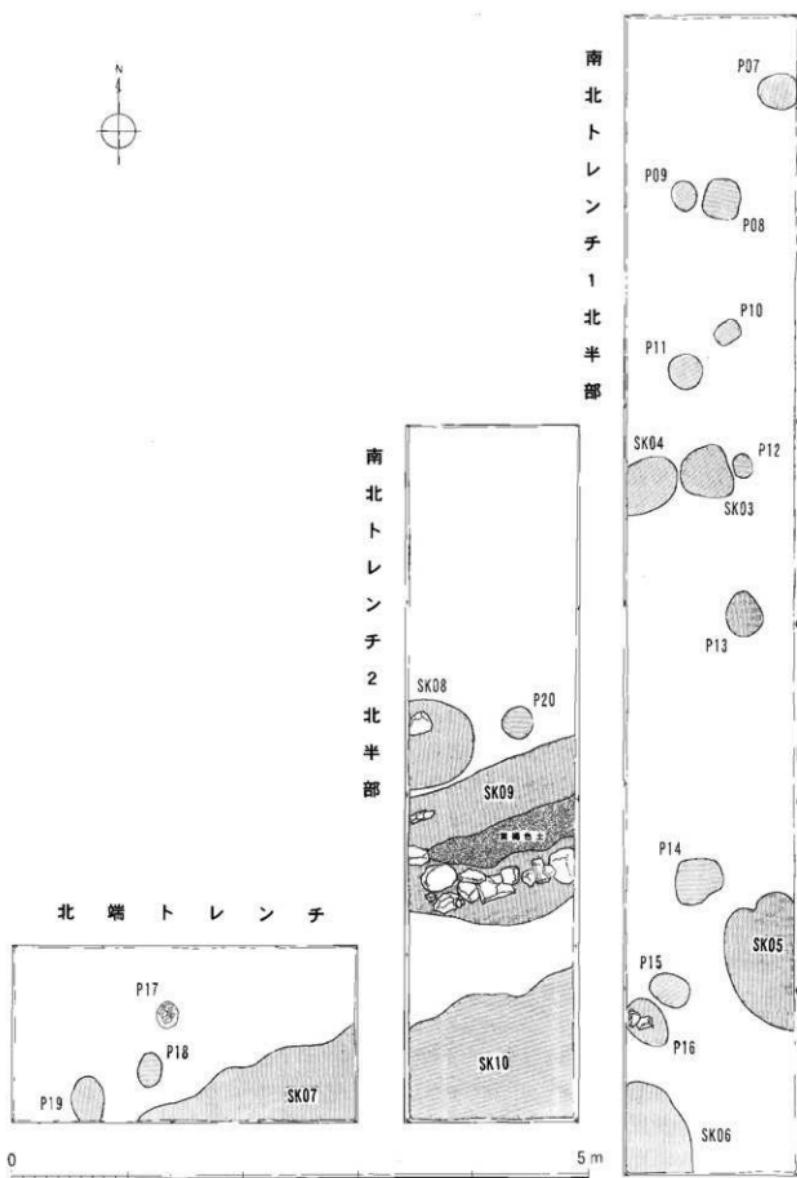
南北トレント1北半部（第3図・第7図・図版04-1）

本調査区は、北東側に設けた幅1.5m、長さ10mを測るものである。遺構はSKとした土坑状のものは4基、柱穴状のものは10基が表出しており、その表出数は11調査区中で最も多かった。また遺物は、攪乱されていると思われる1層、あるいは削平された4層との層間（2・3層も搬入していると想定されるが、明確には把みきれていない）に陶磁器・鉄器・瓦質器類など数10点が出土しており、中には中世期のものも散見され、遺構との関連が考えられる。これらの遺構には灰褐色土が陥入するものが多かったが、P09のように3層の黒褐色土が嵌入しているものもみられたのである（図版04-1）。またP16では、坑上に径20cm余りを測る2石が表出しており、これらは礎石の根石の残存とも考えられる。しかし後世におけるところの強い削平が行われたという状況下では、本格調査においても、その様相を明確に立証することは困難であるかも知れないと考える。

南北トレント2北半部（第3図・第7図・図版04-3）

本調査区は、北側のほぼ中央にあたる場所に設けたもので、幅1.5m、長さ6mを測るもの。遺構は、SKとする土坑状のものが3基、そして柱穴状のものが1基表出しており、それらの特にSK09上には陶磁器・瓦質器などの中世期のものを伴って出土したのである。

また本土坑には南西-北東方向と捉えられる石列が確認され、20~50cmを測るそれらの石列は、集石状を成し、中には焼石もみられたのである。そして土坑の色調は、粘質性の強い茶黒色を呈し、2層の灰褐色土と3層の黒褐色土が混在して成了した土質ではないか、と想像するものであった。また、その石列に沿う北側には砂性の黄褐色土が嵌入し、その北-南側の両端は火を受けたように茶



第7図 遺構図(2)

褐色を呈していたのである。そして同坑上には数点の鉄器や鉄滓も出土しているため、精練鍛冶の炉跡であったとも考えられる。なお、石列の1体には、砥石に代用されたと思われる粘板岩も含まれていたのである（図版04-3）。

北端トレンチ（第3図・第7図）

本調査区は、北端の中央に設けたもので、東一西方向に1.5m×3mのものである。遺構として捉えられるものは、柱穴状のもの3基と土坑状のもの1基であった。このうちP17としたものには、坑上に5石の礫石がみられ、礎石の根石であろうと考えられた。これらの遺構は、1層の耕作土と3層として捉えている黒褐色との層界に表出したもので、本調査区においても強い削平が行われていたことが窺われた。

その他の調査区と遺構の傾向

その他、南北トレンチ3北半部としたものや、また土軸トレンチとした4地区の調査区では遺物は出土したものの、遺構においては顕著でなかった。これは中央部を中心に比度の高い削平が行われた結果だったと想定される。一方、緩傾斜に派生する西側端に向かっては、比較的堆積層があるにもかかわらず、そうした遺構が確認されなかつたのである。このことは本来のその地点域には遺構はなかったのではないかと想定され、平坦を成した中央部の無遺構といいながらも、その意味あいとは大きく異なるのである。

前節でも述べているように、本遺跡の最大のネックは、何といっても旧澄川小学校建設に伴って整地されたと想定される削平にあろうと考えられ、大半の遺構は失われているものと思われる。中でも柱穴状のものに伴う礫石などは、礎石式のものに関わると想定されるが、例え本格調査をするにしても、その削平されたという事実的なものが影響し、危惧されるところである。しかし今後、本格調査を通じ全面掘りをしていく中で、遺構の陥入状況、あるいは柱列や柱間隔などが明らかになつていけば、大きな成績を生むはずであり、期待したいところである。

（渡辺 友千代）

第4章 出土遺物

第1節 はじめに

本遺跡における出土遺物は、時期的に大別して、おもに中世・近世・現代との3つに仕分けできる遺物ということができる。これらは擾乱層であった1層、あるいは僅かに存在した2層などに出土したもので、その数約600点余りであった。またその内訳は、陶磁器約440点・瓦器質土器（瓦を含む）約70点・鉄製品約50点などであったのである。また黒耀石は1点しかなかったために、取り扱わなかった。

これらのうち実測は、本遺跡を特徴付けるものと思われるものを中心にみていくことにするが、実際に、搅乱の層序の1層からの出土遺物の多く、主体が同上の中世期ということにより敢えて図化している。

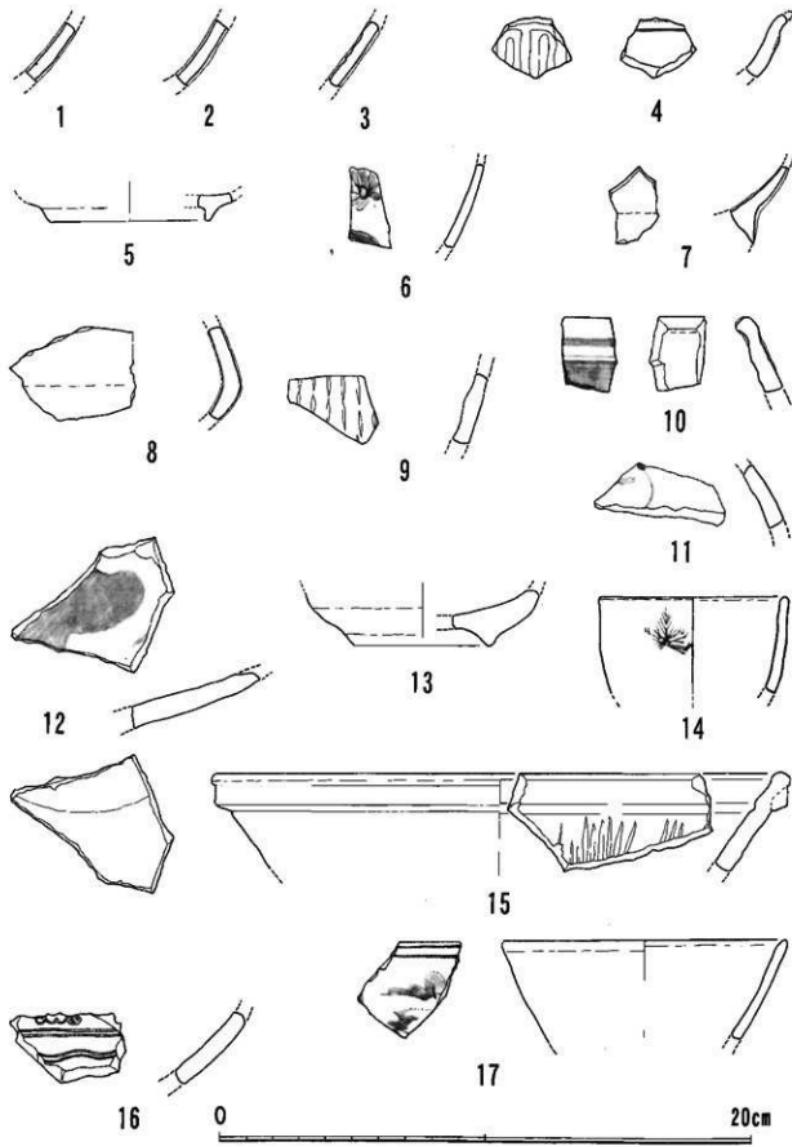
以下簡略であるが、私なりに観ていこうと思う。途中、思い違いの部分も多数あると思われるが、ご容赦いただければと思うのである。なお、陶磁器関係については、広島県立美術館の村上勇氏に教示をいただいたものである。

第2節 実測遺物

陶磁器類（第8・9図・図版06） 本章でとりあげた遺物を、輸入陶磁器と国産のそれとに大別してみると、1～7を前者、8～24を後者と想定できる。そのうち1～3は青磁片。いずれも主軸トレンチ左辺部の1層から出土したものである。1は碗の胴部で、その体部はなだらかな丸味を帯び、器肉は上方に向かって僅かに薄くなる。釉調は透過性の黄緑色で、2・3に比べ光沢を持ち、胎土は灰色で緻密。釉中に内外ともに多数の気泡を持ち、外面素地には横方向に一条の線刻を施す。その型態的な特徴から、おそらく15世紀ごろの、それも龍泉窯産（明朝）のものかと考えられる。2も碗の胴部。体部は全体的に丸味を帯び、外釉面に有する僅かな釉の盛りあがりは、やわらかなくびれを形成する。釉調は失透性で、外面の暗オリーブ色に比べ、内面はやや白っぽくすむ。釉厚及び器肉は1・3に比べ僅かに厚く、胎土は灰白色で緻密。3は内面素地に刻文を施した碗の胴部で、刻文部は断片的なため文様は判別できない。胎土は2には比べ僅かに白く緻密で、釉調は明黄緑色、その釉中に細かい気泡を多数有するためか、半透過性を呈する。また器肉は1・2よりも薄くなっている。2・3とも型態的にみておそらく15世紀ごろの中国青磁だろうと思われる。

4は施釉陶器の碗で口縁部付近である。体部はなだらかな丸味をもち、口縁部に至る外方向に屈曲する兆候をみせ、上下にひき延ばしたS字状を呈している。外面には、そのくびれ部から胸部下方へ向けて、数条のややつぶれたかまぼこ状隆起を成し、全体に水波文が施されている。釉調は乳白色で、屈曲する端部両面に、1・2本の条線を施釉し、釉厚は全体的に薄く、また灰褐色の胎土を有している。16世紀ごろの中国製かと想定している。

5は白磁で、おそらく皿の損壊したものの底部であろう。疊付は砂粒を少量を含んで、不均一な



第8図 出土遺物実測図(1)

ザラザラ感を呈したもの、釉調は灰乳白色で、高台および高台内にも被る。そして胎土は、灰白色で緻密。おそらく16世紀ごろの中国産であろうか。また6は染付磁器で、おそらく茶碗の胴部であろうか。その体部はなだらかな弧を描き、器肉は薄い。そして内外とも施釉されているものの、染付を見る限り花文を施した外面のみで、青白色の釉調によく調和している。窯産はおそらく中国で、年代は16世紀ごろと思われる。7も磁質の茶碗と思われる底部であり、高台から高台脇へとなだらかに屈曲し、腰部へと延びている。藍色調の外釉は、青白色調の内釉よりもやや厚く、また外面高台下部には、釉切れによる土見を呈する。そして胎土は、灰色で緻密である。中国産で、16世紀中ごろと想定される。

1～7は、いずれも主軸トレンチ左辺域の1層・耕作土から出土している。なお、のちに出てくる各地名についての出土部所については、その記述を省かせていただく。

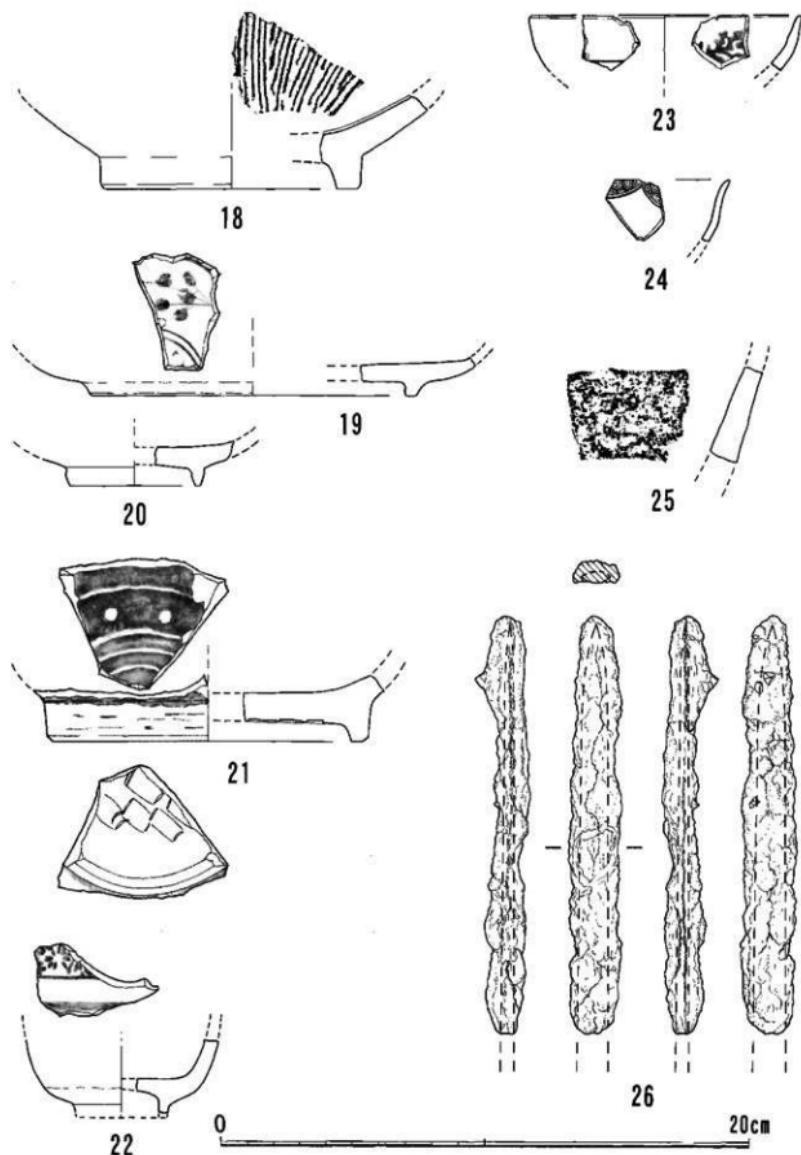
8～24は国産陶磁器である。そのうち8は陶質壺の胴もしくは肩部であろう。器形は、内面に「く」字状に折れ曲がって、なだらかに屈曲する。また灰褐色を呈する胎土には、内外面とも白潤釉を被られ、全身に細かい氷裂文を生じている。これは、南北トレンチ2北半部の2層から出土している。そして9はおそらく碗の胴部で、内面には成形時の指なで調整痕がみられる。外面には「とびがんな」と呼称される、笠の葉を連結させて、列状に並べたような彫刻を施している。全身に細かい氷裂文がみられ、施釉面は極めて薄く、透明度の高いものであるために、灰黄白色を呈する緻密な胎土に類似した鉛色を示している。

10は日本製の青磁で、おそらく鉢などの仏花器の類である。口径凡そ9cmを測る口縁部で、その体部は中心部へと窄まりながら、口縁端部にて短く内反している。また外面表地には、広狭する幅をもった2・3条の横線文が走る。胎土は灰白色で緻密、釉調はうすい翡翠色で、釉中に細かい気泡を持つ。南北トレンチ1北半部の1層からの出土。

また11～13、15～19は、九州系のものと考えられる陶磁器類で、そのうち11は、陶質壺の胴部もしくは頸部と想定されるもので、おそらく肥前系（長崎）のものであろう。その体部はなだらかな弧を描いて、外面にはわずかに絵付文様を施し、そして整形時の稜もみられる。全身に氷裂が施されていて、釉面は灰色系の釉調を呈していて、胎土色に比べやや明るめである。12は平皿の底部付近で、器内面には二彩の絵付を施されている。その描写は精緻で、緑釉や黒釉を巧みに使いわけながら、松などの植物類を描いている。胎土は、レンガ色に似た赤褐色を呈していて緻密である。おそらく18世紀ごろの九州系のものであろうか。また茶碗の底部である13は、17世紀初頭の唐津焼で、内面には鉄釉による単純な絵付を施しているものである。胎土は茶褐色で、外面高台脇には、ロク口成形時の調整痕を顕著に遺している。

14は湯呑の口縁部で、径凡そ7cmを測る。外釉面の乳白色上に松の文様を描いて、また器肉は薄いつくりである。近世末期のもので、主軸トレンチ右辺域の2層からの出土である。

壺鉢である15は、径凡そ20cmを測る口縁部。その口作りの外面は、上方から小・大2段の棱を構成していて、その張り出した下方部は貼り付けである。器体はわずかに外反して開き、その貼付け部に至ってやや内反する。器体の素地には成形時の調整痕を遺して、内面のきざみ目は不均一。素焼で赤褐色を呈して、胎土は黄褐色で砂粒を含み粗である。これも近世のもので、九州の外山焼と



第9図 出土遺物実測図(2)

思われる。南北トレンチ3北半部の1層の出土。16は皿の胴部で、器体はなだらかな弧を描いている。また内面は白濁釉を被られて氷裂文が施され、直・曲線などが描かれ、刻文間にその釉が顯著である。胎土は緻密で赤灰褐色を呈する。おそらく近世のもので、九州系の三島焼と思われる。そして17は茶碗の口縁部で、その体部はゆるやかな弧を描いて立ちあがり、口縁端部に至っている。施釉は両面に施され、全体に氷裂する。そしてその外面には松の文様を絵付して、おそらく九州系のものと想定される。南北トレンチ南半部の1層からの出土である。擂鉢の底部である18は、深いきざみ目や均整のとれた高台、そして黄灰色で緻密な胎土を有すること以外は、15と同様である。染付磁器である19は、平皿の底部である。その内面には、呉須で薄く草花文を施されていて、白色の下地に映えて美しいもの。施釉は疊付を除いて全体にかかっていて、また胎土は白色で緻密である。17世紀中ごろで、伊万里焼の古い型式と思われる。

20は、おそらく碗の底部である。内外面ともに施釉されていて、高台まわりを除いた部分に、氷裂がのこっている。その高台は、径凡そ4cmを測るしっかりとした作りを呈していて、その釉調は白濁色。そして胎土は、黄灰色で密である。これは、南北トレンチ2北半部の1層からの出土で、おそらく17世紀前半のものと想定される。

21~24は、地元窯と考えられる陶磁器類で、そのうち21は、おそらく壺の底部であると思われる。内外面ともヘラ具で調整されていて、しっかりとした成形を呈している。また内面に被る釉相は、中心部から派紋状に拡がるもので、当初は成形時の素地調整痕によるものと観察していたのであるが、実際には意図して派紋状に施釉した可能性が強いものと思われた。その高台部分は、褐色を露出させた土見を形成していて、また高台内には、叩きしめと思われる（おそらくは竹管などの叩き棒と思われる）押痕を遺している。胎土は、1~2mmの大砂粒を少量含んで密であり、また釉調は透明な緑釉で、釉面全体に氷裂文である。これは、近世後期の地元窯・石見焼と思われるものである。22は、湯呑の底部で、外面に呉須で花文様を染付していて、その発色は19よりも濃く鮮やかである。その器肉は、やや厚みをもち、腰から口縁部に向けてなだらかに立ちあがる。これは、地元窯の白上焼と思われるもので、南北トレンチ南半部の1層からの出土。23・24も白上焼であって、胎土も同様である。両者とも碗の口縁部であって、前者はやや小振りな茶碗の部類で陶質のもの。また器肉は両者とも薄手であって、器体は後者においては、口縁部付近でやや外反している。両者にみられる染付は、相方とも花文様と思われるもので、ただ後者においては、スタンプ印の可能性をうかがうことができる。そして釉面上の氷裂は、前者の外面のみにみられるものである。

瓦器質土器（第9図・図版06） 25は、おそらく壺類の胴部である。内外面ともナデ調整で器面は粗く、煤を付着させている。なかでも外面部分では、成形時の指圧痕が顯著で、凸凹している。器肉は底部に向かって厚みを帯び、胎土は砂粒を少量含んで、黄灰色を呈する。おそらく中世期のものと思われるもので、煮炊き用などの生活雑器として捉れるのである。

金属器類（第9図・図版06） 26は、短刀あるいは小刀類と想定されるもの。全身は酸化のためか鏽を付着して赤褐色を呈し、そのため遺物面は凸凹する。在存器長約16cm、刃部の厚み約0.4cmを測るもので、中世期のものと考えている。

（山本 浩之）



調査地点鳥瞰（調査地点は本格調査のもの）

図10-1
城跡遠望（南西から）



北西からみた調査地點



南北トレンチ2 南半部の堆積状況（南東から）





主軸トレンチ左辺部の東壁・南壁とその堆積
状況（西から）



主軸トレンチ左辺部・中央寄の掘削状況
(南西から)



南北トレンチ北半部の東壁と表出した遺構
(西から)

三

二

一

南北アレンチー北半部の掘削状況（南西から）



南北アレンチー北半部の桑の植培の跡
(北西から)



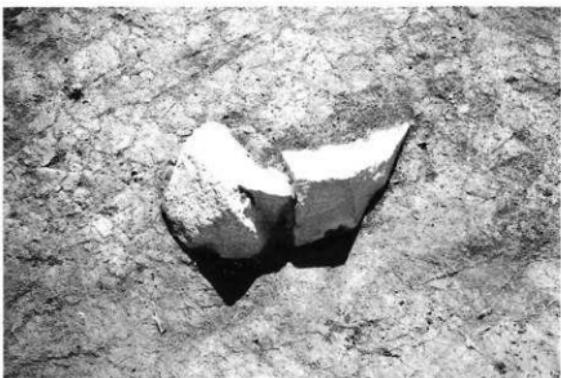
南北アレンチー北半部から出土した巨石と
石列表出状況（東から）



一

三

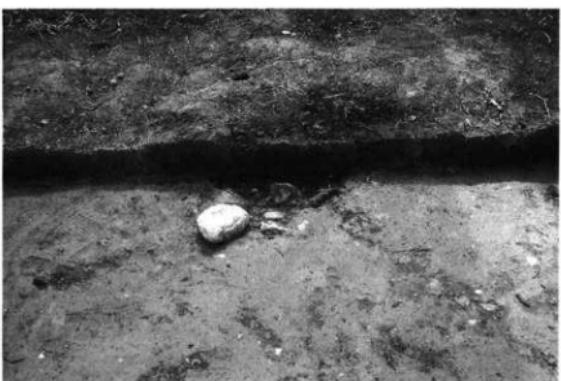
二



南北トレンチ一南部のPO四表出状況
(東から)(5)

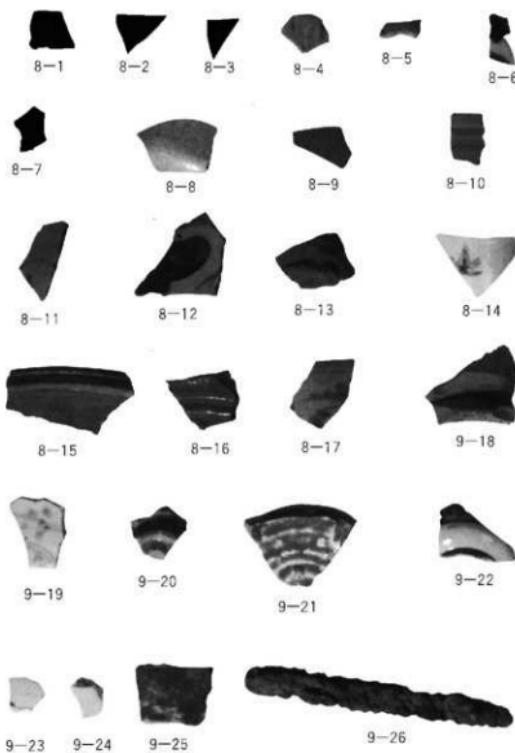


南北トレンチ二南部のPO一表出状況
(東から)(5)



南北トレンチ二南部のPO二表出状況
(西から)(5)

圖版〇六



出土遺物

平成11年3月19日 印刷
平成11年3月29日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第27集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XI

発 行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見 1260

印 刷 第一法規出版株式会社
広島市中区上八丁堀 5-21
